

はじめに

学生時代から現在に至るまで二十五を超える言語（外国語）を習い、実際に現地で使ってきた。そう言うと、「語学の天才なんですね！」などと感嘆されてしまうのだが、残念ながら現実はまだでちがう。

私^が使える言語の中で、最も得意なのは（日本語を除くと）圧倒的に英語であり、その英語ですらネイティヴの言うことはさっぱりわからず、自分で発する言葉もグズグズのブロークンである。それがいちばんの得意言語だというのだから、あとは推して知るべしだろう。

だいたい語学の天才というのは、もつとスマートな人にちがいない。私のイメージでは、「涼しい顔でウイスキーのグラスを傾けながら初対面の外国人を相手に四つか五つの言語を駆使してジョークを飛ばすような人」ということになっている。ここでなぜウイスキーなのかはわからない。日本酒でもワインでもいいはずだが、やはりウイスキーである。おそらく私は「国際人」と「語学の天才」を混同しているであろう。しかも現実にはどちらも見たことがないうえ、国際人については、前世紀のビジネスエリートみたいなものが念頭にあるので、こんなアナログな幻想を抱いているのかもしれない。

ウイスキーはともかく、「語学の天才になりたい」というのは私の叶^{かな}わぬ夢だ。天才になりたいと

という言い方からして間違っているが、心の底からそう思う。しかるに現実の自分は外国人を目の前にすると、必ずあたふたする。壊れかけのコンピュータのように脳内でせわしなく過去のデータをひっくり返し、単語や音声を探し文法を組み立て、汗びっしょりかいたあぐく、ようやく「こんにちは」と一言発するだけという有様で、ひどいときには絶句してフリーズしてしまうこともある。

よく「英語を話そうとすると頭が真っ白になる」と言う人がいる。傲慢ではないが、私の人生では十いくつもの言語でしょっちゅう、そういうことが起きている。ソマリ語が話せるという触れ込みでソマリ人に引き合わされたものの、相手の言うことがまるでわからないどころか、「これ、本当にソマリ語か？」と疑問にかられたこともある。相手のソマリ人こそ「こいつがソマリ語の話せる人間？」と疑問にかられたことだろう。

こんな語学の天才がいるだろうか。いるわけがない。それどころか私ほど語学において連戦連敗をくり返し、苦しんでいる人間はそうそういないはずだ。

でも、というか、だからこそ、私は語学に対して並み外れた深い想いを抱いている。言いたいことも山ほどある!!

……初っ端から興奮しすぎてしまったかもしれない。語学のことになる私はずぐテンションが上がつてしまうのだ。

冷静に考えてみれば、そもそも私の語学は普通の人が思っているものとはかけ離れている（念のため断っておくと、「語学」とは「言語（外国語）の学習」を指す。学問ではなくて技術の習得である）。通常、語学というのは入門から始まり、初級・中級・上級と何年もかけて少しずつ階段を上がっていくものと思われるが、私は決してそのような手順を踏まない。一つの言語を何年も勉強したこ

と自体がほとんどない。学習期間は長くてもせいぜい実質一年、短いときは二、三週間、平均すれば数カ月といったところだろうか。現地で出会った言語を即興で習いながら旅をすることもある。

目的も普通の人とは異なる。私が語学に精を出すのは、アジア・アフリカ・南米などの辺境地帯で未知の巨大生物を探すとか謎の麻薬地帯に潜入するといった、極度に風変わりな探検的活動のためだ。この「探検的活動」が意味する範囲は広く、なかにはノンフィクションの取材も含まれるのだが、いずれにしても、目的が達成されるとその言語の学習も終了してしまう。

要するに、私にとって言語の学習と使用はあくまで探検的活動の道具なのである。しかし、言語（語学）はひじょうに強力な道具なので、ときには「魔法の剣」のように思える。てきとうに振り回しているだけで自然に「開かずの扉（に見えるもの）」が開いてしまったりするからだ。こうなると、俄^{ぜん}然、道具である言語自体にも興味が湧いてくる。

いくつも魔法の剣を使っているうちにそれを比較したり、中身を自己流で分析したりしてしまうのは人の性^{さが}である。すると、それは魔法でもなんでもなく、極めて論理的な構造をもっていることがわかってくる。ただ、その論理は日本語とちがうし、各言語同士でも似ているところもあれば、まるつきり別の組み立てであることもある。すごく不思議な構成だったりもする。でも必ずそれぞれが一つの独立した小宇宙となっている。アフリカのジャングルで話されているマイナーな言語でも、世界中で話されている英語のようなメジャー言語でもそれは変わらない。しかも言語を学ぶと、それを話している人たちの世界観もこちらの体にも染み込んでくる。それが面白くてしかたない。

いつの間にか、私にとって語学（言語）は「探検の道具」であると同時に「探検の対象」にもなっていた。

新しい探検テーマを見つけると、そのテーマと同じくらいその現場で話されている言語にもワクワク

クするようになった。語学から未知の世界へ斬り込むのが二十代前半にしてすでに私の十八番おはちばん（というよりワンパターン）になってしまった。

この魔法の剣は、副作用も強烈だった。一つのテーマが終わるとその語学も終了してしまうから、学習・使用期間は短い。そして使わなくなると、言語能力は砂漠に撒まいた水のようにたちまち蒸発してしまう。無念である。ただでさえ語学の天才ではないのに、言語を学べば学ぶほどに天才への道が遠ざかっていくのだ。

もともと一つの言語を地道に学習すればいいと自分でも思う。でも私はまるで薬物依存症患者のように、次から次へと新しい言語をつかまえては習って現地の人と話してみたくなる。新しい言語宇宙を探検したくなる。語学の魔力はかくも恐ろしい。

語学（言語）の何がいったいそんなに魅力なのか。語学が少しでもできるとどんなことがわかるのか。言語を短期間で覚えるにはどのような方法が有効なのか。今回は、それを読者のみなさんになんとかうまくお伝えしたい。問題は方法だ。語学（言語）は人に伝えるのが難しい。英語以外の語学をやったことのない人にいきなり今の私の考えや感覚を話しても、理解してもらえない可能性がある。

これに関しては本当に悩んだが、最終的に、自分の体験を最初から語っていくしかないと思いついた。初めは英語すらまるで話せない、ごく普通の日本生まれ日本育ちの若者が劇的に変わっていく様子を追体験していただくのがベストな方法ではないかと。

こうして書き始めたこの語学エッセイだが、期せずして次第に「青春記」の形を取り始めた。語学を通して、若い頃の私は実にさまざまなことに驚き、笑い、興奮した。ときには意気消沈したり自分に絶望したりした。そういった経験がそのまま私の血肉になっていったのである。バカな若者が賢い大人になったわけではなく、バカな若者がもつとバカになっていっただけかもしれないが、変化と成

長はたしかに語学によってもたらされた部分が大きい。

私の探検的活動や青春時代が語学と切り離せない以上、本書に書かれるエピソードのいくつかは、私がこれまでに書いた本と重複する部分が出てきてしまうが、そこはご勘弁いただきたい。

また、本書では言語や言語学について多少詳しく説明することもあるが、もし面倒に感じたらそういう部分は飛ばしていただいてもかまわない。

単に破天荒な辺境紀行として、あるいは世界の民族や文化を楽しみながら学べるエッセイとして、読んでいただいてもけっこうである。

読み終わったとき、少しでも語学（言語）を好きになっていただければ嬉しい。

目次

はじめに 1

第一章 語学ビッグバン前夜(インド篇) 9

1 驚きの海外英語初体験 10

2 「正しさ」にこだわる人はいない 20

3 奈落の底で語学の真実に開眼 27

第二章 怪獣探検と語学ビッグバン(アフリカ篇) 35

1 フランス語という魔法 36

2 ゴジラ襲来 44

3 語学ビッグバン 55

4 ウケる! リンガラ語学習 65

5 謎の怪獣はフランス語で何と呼ぶか 74

6 親しくなる特効薬の強烈な副作用 83

7 マルチリンガリストの苦悩 90

8 アイデンティティ・クライスとボミタバ語学習 97

9 民族語の世界とムベンベの正体 104

第三章 ロマンズ諸語との闘い(ヨーロッパ・南米篇) 115

1 イタリア語との初対決デスマッチ 116

2 スペイン語は平安京言語 132

3 魔術的リアリズムの旅 143

4 ブラジル・ポルトガル語に惨敗 157

- 5 アフリカ文学で仏文卒業大作戦 166
6 フランス語との最後の闘い 172

第四章 ゴールデン・トライアングルの多言語世界（東南アジア篇） 181

- 1 理想の語学学校でタイ語を習う 182
2 チェンマイで迎えた第二の青春 189
3 みんなが満足！ マンガ学習法 198
4 麻薬王のアジトでシャン語に出会う 206
5 究極のビルマ語レッスン 218

第五章 世界で最も不思議な「国」の言語（中国・ワ州篇） 231

- 1 言語のノリと中国語の衝撃 232
2 史上最高の語学教師、莫先生 241
3 ラクをして覚えたいから探検する 251
4 中国・タイ・日本の大迷走 262
5 雲南語でワ語を習う 277
6 世界でいちばん不思議な「国」の言語事情 287
7 標準語と村言葉のクレバスで遭難 294
8 「こんにちは」も「ありがとう」もない世界 305

エピローグ そして語学の旅は続く 318

参考文献 330

おわりに 332

本書をお読みいただく前に

・言語と語学に関して、以前から友人関係にある三名の研究者の方にご協力をお願いした。言語学一般と日本語については実践女子大学の山内博之教授と聖心女子大学の岩田一成教授に、そして中国語についてはお茶の水女子大学の橋本陽介教授に、それぞれ原稿をチェックしていただいた。ただし、文責は筆者にある。

・本書では「コンゴ族」「ボミタバ族」「ワ族」というように、「く族」という言葉をとくどき用いている。この表現は途上国地域の民族を対象にしたときにしか用いられないことから蔑視的であると言われ、筆者もそう思っているのだが、かといってそれを「コンゴ人」とか「ボミタバ人」とだけ書くとも民族なのか国民なのかわかりづらくなってしまう。そこで、本書ではやむを得ないところだけ「く族」を便宜的に使い、他に言い換えられる表現がある場合は「ボミタバの人たち」とか「ワ人」などと書いて、「く族」を回避するように努めた。

・現在日本語学界では、日本語の「標準語」という言い方があまり好まれず、「共通語」という言葉が使われるそう。でも、「共通語」は「世界の共通語は英語」というときのように、“機能”を表す言葉である。だから、「青森県の人と鹿児島県の人」の共通語は標準語だ」というような言い方ができる。もしこの「標準語」を「共通語」に置き換えてしまつたら、「青森市の人と鹿児島市の人」の共通語は共通語だ」となり、ひじょうにややこしい。

他にも理由があるが長くなるので割愛するけれど、本書では読者のわかりやすさを考慮して「標準語」を使つた。

・本書で掲載している地図と図版は筆者が手持ちのお絵かきアプリで作成したものである。

第一章

語学ビッグバン

前夜

(インド篇)



19歳インド人旅のルート

1 驚きの海外英語初体験

目の前で鳥みたいな顔をした英語ネイティブの女性が何か懸命に喋^{しゃべ}っている。私はそれをぼーっと見ていた。

——どうしよう。何一つわからない……。

ここはインドのカルカッタ（現コルカタ）。初めての海外旅行で、これが事実上の「初日」だった。片言のやりとりで済むタクシীর運転手やホテルのフロント係は別として、初めてまとまった会話をする相手の言うことが全くわからない。動揺すると同時に妙に納得もしていた。やつぱりな、という気持ちだ。自分の英語学習の歴史を振り返れば当然のことだった。

父は英語教師だったが……

子供の頃、私は語学に特別な関心をもっていなかった。

英語は身近な存在だった。身近だけど親しみがもてない存在と言うべきか。

父は高校の英語教師で、しかも勉強熱心な人だったから、英字新聞の『ジャパン・タイムズ』や米『タイム』誌を定期購読していた。他にも英語の本が家のそこかしこに置かれていたが、私にとってそれらは「父の仕事道具」にしか見えなかった。会社員のお父さんが日本経済新聞や『週刊東洋経済』や『戦国武将に学ぶリーダー術』なんて本を読んでいてもたいいていの子供は興味をもたないだろう。

それと同じだ。

父は朝、米軍のラジオ局が放送する F E N（現 A F N）をかけていた。主に自分の勉強のためにだが、おそらく子供たちを英語に親しませようという意図もあったのだろう。毎日朝ご飯を食べながらアメリカ人アナウンサーの言葉をなんとなく聞いていたが、そこから何一つ学ぶことはなかった。音楽を聴くように聞き流していたからだ。私だけでなく、三つ年の離れた弟も十数年聞き続けたが、結果は同じである。

いまだに「聞き流すだけで英語がペラペラになる」という謳（うた）文句の語学教材があるが、そんなことは絶対にありえない。もし誰かが英語（か他の言語）を聞き流しているだけで聞き取りや会話がでるようになったとしたら、それは聞き流しているのではなく、集中して耳を傾けているはずだ。もちろん、その人が語学の天才なら話は別だが、天才ならどんなやり方でも習得できてしまうだろうから、学習法を語ることは無意味である。

父は何度か私と弟に英語を教えようと試みたが、毎回二週間と続かなかった。親が先生役になって子供は素直に言うことを聞かない。すぐ口論になったり子供たちが居眠りをしたりして、互いに嫌（いや）気がさしてやめてしまうのである。

子供に英語を学ばせようという、父の試みはほとんどが水泡に帰したが、一つだけ功を奏したものがあつた。N H K ラジオの『基礎英語』だ。小学校六年生になったとき父に「これを毎日聞くように」と命じられた。なんと朝六時五分から二十五分までの二十分間である。その前に犬の散歩に行かなければならなかったのだ、毎朝五時半過ぎに起きなければならなかった。

これを毎日、一年間続けたのである。聞き損なつたのはたった一日だけ。寝過ごしてしまったのだ。その日の夕方、二階から一階へ下りる階段で父とすれ違つたとき、不意に「おまえ、今日、『基礎英語』

を聞かなかつたろう」と言われたことを今でも鮮明に憶えている。

当時から朝に弱く、勉強熱心でもなく、父の言うことに従順でもなかった私が、どうして基礎英語だけは聞き続けたのかは謎だ。特に面白いとも思わなかったし、それで英語が好きになったわけでもなかった。子供なりに「来年から中学にあがるから、英語ぐらいは少し勉強しなきゃ」と思っていたのかもしれない。その辺は記憶の霧の彼方である。

翌年、中学一年生のときも、『基礎英語』かそのワンランク上の『続基礎英語』を聞いた記憶があるが、初年度のような「一日も聞き逃せない」という緊張感はなかった。週に何回か聞いていた程度じゃないかと思う。結局、二年にわたって毎日二十分ずつNHKのラジオ講座を聞いたことが、大人になる前に受けた唯一の英語会話レッスンとなった。

『基礎英語』（と『続基礎英語』）のおかげで、中学の英語の授業はわりあい余裕をもって受けられたが、もちろんすべて片づくほど世の中は甘くない。そして、私は幼少の頃から地道な努力が心底苦手であつた（今もそうである）。動詞の活用とか単語のスペリングの暗記といった単調な作業がどうしてもできない。たちまち睡魔に襲われ、寝てしまふ。

逆に言えば、このような怠惰な性格ゆえ、いつも「どうやったらラクして覚えられるのか」を追究していた。例えば、こんな学習法をやってみたことがある。英語で重要なのは動詞だという。でも、教科書に出てくる動詞すべてを覚えるのは不可能だ。いや、不可能じゃないかもしれないが、あまりに面倒くさい。ならば、最もよく出てくる動詞を厳選して十個だけ覚えればいいんじゃないか。それだけ覚えてあとは捨てる。捨ててはいけないとわかつているけれど、どうせ全部は覚えられないのだからやむをえない。

でも、最もよく出てくる動詞はどれか。それを知らないと十個選ぶことができない。そこで、教科

書の最初から最後まで動詞の頻出度を調べてみた。giveとかdoとかtakeといった動詞の数を「正」の字を書きながら数えていく。途中からレースの観客になったような気分で「おっ、トップのジョーが猛追している！ 頑張れ！」などと応援したりした。時間が経つのも忘れて夢中になり、この調査の過程でけっこう覚えてしまった。

最終的にベストテンが出揃ってもそこで終わりにはならない。これはあくまで「自分が覚えるべき動詞」の選抜なので、すでに私が覚えている動詞は不要だ。それを外して、十一位以下の動詞を繰り上げていく。でも、自分が覚えているかどうかはテストをしてみないとわからない。次はテスト表を作り、自分で解答していく。正しい答えが書けたものは外し、間違っただけを入れて「マイ動詞ベストテン」を作る。まるでプロ野球で監督が先発メンバーを選ぶようだ。しかも、これはあくまで「先発」にすぎない。時間が経てば、その中の動詞を私が覚えてしまう可能性があり、するとその動詞はもうベストテンに入れておいてはいけなくて外す。そして、控えの動詞を繰り上げてベストテン入りさせる。気分はプロ野球監督なので楽しい作業だ。

相撲の番付のように東の横綱have、西の横綱beといったように英語動詞（あるいは名詞・形容詞・副詞）番付を作ることもあった。ランキングや番付作りは気分がいい。[haveは前評判どおりだが、beもよく頑張った]などと英単語相手に上から目線になれるからだ。これも面白い。相撲は横綱がいちばん偉いと思っていたが、実は相撲協会がいちばん偉いのである。そして自分は相撲協会の立場に立っている。面白いはずがない。

こんなことをやっていると、結果的にだが、教科書に出てくる単語をどんどん覚えてしまう。苦にならないどころか、意外な単語が上位に来るといった発見もあって純粋に面白い。

「ラクするためにあらゆる工夫を凝らす」というのは、語学好きに転じても毎回試みる方法となり、

まさに「三つ子の魂百まで」である。

とはいえ、子供時代の私にとって英語は他の教科と同じく、義務的に学習するものでしかなかった。高校になると環境が変わった。私が進学したのは早稲田大学高等学院（通称「学院」）という早稲田大学の付属校だった。ひじょうに偏差値が高い学校として知られるが、私は同じ年の子供がとても少ない丙午（ひのえうま）（一九六六年）生まれだったことと国語の成績がよかったおかげで、英語と数学が並み以下にもかかわらず合格してしまった。

だが、ここが本当にどうしようもない学校だった。大学受験がなく、全員がエスカレーター式に早大へ進学できるので、ほとんどの生徒が驚異的なレベルで勉強をしない。先生も教える熱意がない。期末試験なども超絶に易しく、試験当日に教科書の当該範囲を一時間読めば七〇点ぐらいとれるほどだった。それでも教科書を一時間も読むのが苦痛で、私は苦手の数学や物理で何度も落第点をとった。ただ、英語だけはなるべく勉強するようにしていた。というのは、将来は世界の秘境へ行き、謎の超古代遺跡を発掘したり、未知の動物を探索したりしたいと思っていたからだ。外国へ行くなら英語が必要だということは、さすがにわかる。

無気力が満ちあふれている学校で、英語科に一人だけ熱血の先生がいた。ふだんの授業でも容赦なく生徒に発音練習をさせるという普通の学校の先生みたいな人だったが、三年生のとき、夏休みの宿題をどかんと出した。『ニューヨーク・タイムズ』『タイム』『ニューズウィーク』などからピックアップした記事を、A4の紙三十枚にコピーして手渡し「全部、翻訳せよ」と言ったのだ。政治・経済・社会・文化・科学など広いジャンルがカバーされており、「本場」の匂いがプンプンした。

ほとんどの生徒は宿題そのものを無視していたが（それで何も問題ない）、私はそういう本場の匂いが好きだったし、単調な作業は苦手でもチャレンジは好きである。苦勞しながらも全て翻訳した。

ところが、熱血先生は二期の初めの授業で「全部ちゃんとやったのは高橋だけだ」と、あろうことか私の名前を間違えて呼んで褒めたのだった。あのときは本当にむかついた。クラスには高橋という友だちもいたのでなおさらだ。授業のあと、他の生徒が高橋君に「すごいじゃん！」と話しかけ、高橋君が「いや、俺じゃないよ。なんか間違えてるんじゃない？」などと答えるのが聞こえてきたが、横から「それ、俺だよ！」なんてことは恥ずかしくて言えず、一人で歯ざりしした。本当に英語にはいい思い出がない。

大学の文学部へ進むと、クラスには全国から激しい受験戦争を勝ち抜いてきた学生たちが集まっていた。私たち「学院」出身者のほとんどは彼らに比べると極端に学力が劣る。「学院」出身者にしては英語をそれなりにやっていた私も、英語力はクラスの下の方だったはずだ。

見知らぬ小さなおばあさん

すべてが劇的に変わったのは、一年生の終わりにインドへ旅行に行ったときである。私は探検部に在籍していたが、一年生のときは大して活動していなかった。探検部の部室はひじょうにわかりにくい所にあり、私は最初なかなか部室にたどり着けず、やっと場所を突き止めて入部したのは他の部員たちが新入生歓迎合宿へ行っているときだった。つまり、完全に乗り遅れてしまい、部の活動に溶け込めなかった。二年生になる前の春休み、他の一年生は親しくなった先輩たちにくっついてタイの少数民族の村に住み込んだり、西表島でサバイバル合宿をやったりしていたが、私は参加するグループもなく、探検部として最低レベルの活動とおぼしき「海外一人旅」を選択した。目的地はインド。先輩たちの話を聞くと、タイや中国よりは異文化の度合いが高そうで、でも南米やアフリカほど旅するのが困難でもないし旅費も安く済むからだ。



カルカッタを走るリキシャー。

とはいえ、自分にとってこれは途轍もないチャレンジに思えた。なにしろ、英語が全然話せない。その数カ月前、一度、近所にホームステイに来ていたアメリカ人の高校生の女の子を早大に案内したことがあったが、驚くほど会話ができなかった。彼女の言うことがいくらもわからないし、自分が何か言おうとしても頭が真っ白になり、言葉が出てこないのだ。途中からは二人ともずっと沈黙していた。この一件はひどいトラウマとなって私にのしかかっていた。

ましてやインドである。日本人とはまるで違った外見の人たちに取り囲まれて、自分が英語でやりとりする姿など全く想像できなかった。ちなみに、当時の私はインドの言語事情などさっぱり知らなかった。

実際にインドに行ってみると、毎日私の想像力をはるかに超える出来事が起きた。英語面にかぎっても、初日から普通でない体験をした。

ここで冒頭のシーンに戻る。

真夜中に到着し、翌朝、ゲストハウスの食堂で、他の客を真似しておそろおそろ朝食を頼んで食べていると、同じ宿に泊まっていた白人女性が話しかけてきた。西洋人としてはひじょうに小柄で身長が百五十センチぐらいしかなかった。鼻が尖^{とが}っていて目がせわしなく動くので小鳥みたいに見えた。バードさんと呼ぶことにする。

このバードさんの言うことが全然わからない。でも彼女は妙にしつこい。写真のアルバムを広げて嚙^かんで含めるように説明する。時間をかけてなんとかわかったのは、バードさんがニュージールランドから一人で来ていること、熱心なカトリックの信者であり、このカルカッタに同じカトリックの知り合いがいること、その知り合いは以前ニュージールランドを訪問したことがあり、今度はバードさんがその人を訪ねるつもりであること、でも彼女はインドが初めてであり、街中^{まちなか}が怖くて一人では出歩けないから、私と一緒に付いてきてほしいと言っているらしいことだった。

当時、インドの都市、特にカルカッタは犯罪の多い混沌^{こんとん}とした場所という印象を外国人に与えていた。あとでわかったことだが、この印象は間違っていないが、正しくもなかった。というのは、当時のインドでは掏摸^{すすり}や詐欺、盗難は珍しくなかったものの、強盗や殺人、レイプといった凶悪犯罪は稀^{まれ}だったからだ。少なくとも外国人旅行者に対してはそうだったと思う。でもインド（特にカルカッタ）が凶悪犯罪の巢窟^{そうくつ}であるかのような噂も流れたりして、必要以上に怖がる人は大勢いた。バードさんもその一人だったのだろう。

私だって初めての海外旅行の初日であり、カルカッタは右も左もわからないのだが、住所はわかるというので、一緒にリキシヤー（人力車）に乗って出かけた。幸い、バードさんは英語に困らないから、誰とでも普通に話ができる。

途中いきなり彼女が「ストップ！」と言って道路に降り、何か叫んだ。いったいどうしたのかと困惑したが、よくよく見ればカメラを出して写真を撮る仕事をしている。「私の写真を撮って！」と言ったらしい。それすら聞き取れなかった。カルカッタが怖いくせに頻繁に車を止めては街並みをバックにポーズをとるバードさんを私はせっせと写真に撮った。

二十分ほどして到着したのは、石造りの古いカトリックの施設だった。よくわからないが、教会と

いうより修道院みたいな雰囲気だ。頭に白いスカーフをかぶったシスターたちが大勢いる。インド人が多いようだが、なかには明らかに西洋人という容姿の人もいた。バードさんはなにしろ英語が堪能というかネイティブなので、誰彼となく話しかけて、どんどん先へ進む。英語が何一つ聞き取れない私は黙って後を付いていくのみ。

奥まった小部屋に着いた。中に入ると、インド人っぽく見える小さなおばあさんのシスターがおり、バードさんを見ると喜びの声をあげ二人で抱き合った。この人が以前、ニュージーランドを訪ねてきたという知り合いらしい。私もおばあさんと握手をした。すぐ小さくてやわらかい手だった。

バードさんとおばあさんはひとしきり話をして、大いに盛り上がっていたが、英語なので内容は全然わからない。アルバムの写真を見ながらだったから、思ひ出話のようでもあったし、共通の知り合いの近況のようでもあった。

部屋にいたのは意外に短くて、二十分ほどだっただろうか。最後に頼まれて二人の記念写真を撮影した。バードさんは私に「あなたもこの人と一緒に写真を撮ったら？」みたいなことを言った（そういう仕草をした）が、見知らぬおばあさんと記念写真を撮ってもしかたないので遠慮した。

そのまま二人で真つ直ぐ宿に帰った。バードさんはとても喜んでおり、何度も私にお礼を言った。事情はさっぱりわからないものの、私も人の役に立ててよかったと思った。

驚いたのは翌日である。何かイベントの告知らしいのだが、宿のロビーに大きな人物の顔写真のポスターが貼つてある。写真の主は昨日会ったあのおばあさんだった。

「どうして!」と思ってそのイベントのタイトル（当然英語である）をたどってひっくり返りそうになった。「マザー・テレサ」と書いてあったからだ。

あのおばあさん、マザー・テレサ^{*1}だったのか!!

マザー・テレサはそれより六年前の一九七九年、私が中学生の頃にノーベル平和賞を受賞しており、日本でも知らない人がいないという存在だった。マザー・テレサがカルカッタに暮らしているというのも、どこかで読んだ記憶がある。ということは、私が訪れた施設は彼女が運営する有名なホスピス、「死を待つ人の家」だったのか。

英語が皆目わからないがゆえに、世界的な著名人に会ったことすら気づかなかった。これが、私の海外における語学体験の始まりである。

*1 マザー・テレサは、旧ユーゴスラビア、現在の北マケドニア共和国の生まれで、修道女としてインドに移ったのは、一九二八年。



マザー・テレサ

2 「正しさ」にこだわる人はいない

インド各地を旅し、一カ月後、私はカルカッタの中央駅に帰ってきた。

旅を始めたときは別人のように精悍な面構えになっていた。やせてすっかり日焼けし、髪も髭も伸び放題、目は鋭く辺りをうかがっていた。日本を発つ前の、世間知らずのお坊ちゃんめいた面影はない。

だが、それはあくまで外見上である。なぜそういう顔になったのかは聞くも涙、語るも涙だ。インド旅行は試練の連続だった。

香辛料、生水、ぼったくり

まず食事の問題。一九八〇年代半ば、日本では香辛料を使った料理は一般的でなかった。私の実家では唐辛子を一切使わなかったから、私もインドに行くまで「辛い料理」を食べたことが一度もなかった。ところがインド料理には多少なりとも香辛料が含まれている。一口食べると口から火が出そうになった。水をがぶがぶ飲むとその水がよくない。香辛料と生水のおかげで、毎日ひどい下痢に襲われた。町にはトイレがないので、外出するのも恐怖だった。対処法は「極力食事をしない」。朝から夕方まで何も食べない日はざらだった。日が暮れる頃になって、しかたなくサモサやビスケットなどのスナックや菓子を食べる程度だ。結果として、もともと体脂肪がろくになかったのに五キロ以上やせ

た。

もう一つは、人によく騙だまされたこと。例えば、市場に行くと、親切そうな人が声をかけてくる。

「ハイ、フレンド、日本人？ インドは初めて？ じゃあ、私が案内してあげるよ」

喜んで後を付いていくと、インドの伝統的な男性用シャツ「クルタ」やインドの革製サンダル「チャップル」の売り場を紹介してくれた。いろいろな柄や色の商品を見せてもらい、チャイ（お茶）までいただく。そのうえで「特別に安くしてあげる」と言われ、例えば一〇〇ルピーで一着買う。喜んで礼を言い、宿に帰って、他の旅行者や宿のスタッフかオーナーにその話をする、「そんなの一〇〇ルピーだ」と笑われるといった具合だ。

日本では、人を騙すとか騙されるといった行為が日常生活にないので免疫がなく、インドの物の相場を知らない十九歳はいいように騙され続けた。途中から「俺はカモネギになってる」と気づいたものの、向こうも外国人ツーリスト相手の商売人だから、あの手この手を駆使してくる。私が泊まっているゲストハウスのオーナーの親戚だと称したり、「ビジネスでよく日本へ行くよ、シンジユクとかアキハバラとかニッポリとか」などと言って安心させたり、偶然を装って話しかけてきたり……。

いったい何度騙されたことか。騙されるといっても、大金を取られたわけではなく、たいしては日本円にして数百円程度を余計に支払わされただけなのだが、騙されるという状況自体が耐えがたくて私はすっかりインド人不信になってしまった。

英会話がみるみる上達した理由

要するに、ワイルドな外見のうち、やせているのは地元料理が食べられないから、目が鋭いのは騙されすぎたからである。その他、日焼けは単にインドの三月が暑いせい、髪や髭がぼうぼうなのは身

なりにかまわないせいで、我ながら情けないかぎりだ。

ただ、意外なことに英語の会話力は一カ月で見違えるほど上がった。もとがゼロなのだから上がるに決まっているが、それでも現地に着いてしばらくするとインド人の客引きや両替商に取り囲まれながら英語であーだこーだと言ひ合ひをするようになっており、日本を発つ前の私自身が想像できなかったことをやっているのは確かだった。

理由はいくつもある。まず一人でバックパック旅行をしていたのがよかった。日本人二人以上だとどうしても日本語を話してしまうし、仲間うちで閉じてしまいがちだが、一人旅だと他の人と話す余地が出てくる。当時インドを旅するバックパッカーは、ドミトリ（大部屋）に泊まるのが普通だった。他の外国人旅行者と相部屋になる。宿の食堂でも相席になることが多く、自然に会話の機会が生まれる。私はインドまで来て日本人と一緒に過ごしても意味がないと思い、なるべく日本人旅行者とつるまないようにしていたので、なおさらだった。

旅で使う英語は難しくないということもある。ゲストハウスに泊まる、出発する、列車かバスで移動して、次の目的地に到着する、また泊まる……のくり返しだ。使う言葉もパターン化する。しかも、私の他に大勢の旅行者がいる。彼らが言うのと同じことを言えばいい。チェックアウトのとき、私は最初「チェックアウト、プリーズ」などと言っていたが（それでも普通に通じるが）、他の人たちが「I'm leaving.」と言うので、それを真似するようになった。「朝食付きですか？」という表現も他の外国人が「Including breakfast?」とよく訊いているので、その言い方が欧米のきちんとしたホテルで適切かどうかはわからないが、少なくともインドの安宿ではオーケーなのである。

あとは食堂や市場、列車、観光地での会話だが、やつぱりどこへ行ってもやりとりは似たりよった

りだ。相手は商売人が役人で、外国人旅行者への対応にも慣れている。

相手が英語ネイティブでないことが多いのもよかった。「インド人の英語には訛り^{なま}があつて聞き取りづらい」などと言う人がいるが、そんなことはない。英語はインドの公用語みたいなものだから、インド人にとって外国語では全然ないが、学校かテレビか道端^{みちばた}で習う第二言語（もしくは第三言語）なのに変わりない。だからネイティブみたいに音がくつついて聞き取れないということはないし、表現もシンプルである。rの音が巻き舌になり、master（マスター）が「マスタル」に近い音になるとかthがtに近い音になり「Thank you.」が「タンキュー」のように聞こえたりすることなどに慣れれば、ローマ字読みの日本人英語に近くて、とてもわかりやすい。

外国人旅行者の話す英語も同様だ。なかにはイギリス人やオーストラリア人などの英語ネイティブもいたが、多くは英語圏以外のヨーロッパから来た旅行者で、彼らにとっても英語は外国語（第二言語）だから、私より流暢^{りゅうちやう}なのは当然としても、聞き取りやすかった。もってまわった表現や小難しい単語を使うこともない。私と同じようにブロークンな英語を話す人も珍しくなかった。

コミュニケーションは協働作業

学校の英語とちがいで、本番の英会話に初めて挑んで、なによりもありがたくて、意外だったのは、会話の際、相手が助けてくれることだった。例えば、自分の部屋の扇風機が動かなくなつたとフロントのスタッフに言いに行く。でも扇風機を英語で何と言うかわからない。そこで、フロントで回っている扇風機を指さし、これ（this one）などと言うと、スタッフの人は「fan?」と言う。あ、そうそう、ファンって聞いたことがある！ と思いつく。次に「動かない」がわからない。直訳的には「動くmove」だが、さすがにそれはちがうなと思う。そこで次善の策で「使えない」と言うことにする。

“I can't use the fan in my room. (僕の部屋の扇風機が使えない)”

すると、スタッフの人はこう聞き返す。“Doesn't work?”

おお、そういう言い方があるのか！と知る。それで“yes, doesn't work.”とオウム返しに答えると、「わかった。これから見に行く」と部屋に来てくれる。よくよく考えれば、このとき、私は一言も「扇風機が動かない」を英語で言っていない。全部相手が言った言葉である。

学校の英語では、何と言えはいいかわからなければ失格である。授業では恥をかき、テストでは点を落とす。でも、肝心の本番では相手が答えを教えてくれるのだ。そして次回からはそれと同じシチュエーションで同じ表現を使えばいい。

やがて、扇風機だけでなく、テレビでも水道でも電気でも、あるいは交通や行政みたいなシステムにも“doesn't work.”が使えると知った。日本語でいえば「機能しない」である。当時のインドはあらゆるものが“doesn't work.”だったので、頻繁に使う表現だった。その他、腹を下して共同トイレに何度も行っていると、向こうから“Diarhea (下痢) ?”と訊いてきたり、こちらが何かを訊いたら“OK, let me check it. (わかった、今チェックしてみる)”と言われたりなど、会話の流れの中で習った表現は枚挙にいとまがない。

コミュニケーションは協働作業なのである。自分一人で会話するということはない。必ず相手があり、その相手はたいいていの場合、コミュニケーションを成立させるためにこちらに協力してくれる。

私は旅の半年ほど前、車の免許を取りに教習所へ通っていたのだが、ある教官が授業でこう言っていたのを思い出した。「みなさん、免許を取っていき道路に出たら、他の車にぶつけちゃうんじゃないかと心配になるでしょ？でも大丈夫です。他の車（運転手）はみんな、みなさんより上手です。ちゃんとよけてくれます」。当時、これほど教習中の私を安心させてくれた言葉はなかった。

同じようなことが語学にも言えるのである。「言葉が通じないと心配するかもしれないけれど、他の人たちはみんなもつと上手です。ちゃんと助けてくれます」

助けないと会話が成立せず相手も困るのである。下手な車をよけないと他の車が困るように。

ちなみに、先ほどスタッフの人の質問に答えて、私が「Yes, doesn't work.」と答えたことについて、主語の「が」が抜けているとか、否定疑問文だから答えは「No」でなくて「Yes」だろうとか、英語を知る人はツツコミたくなるだろうが、そんなことは些細な問題で、この言い方でまず普通に通じる。このあと、世界中を旅してわかったことだが、アメリカやイギリスなど英語ネイティブの国（それも地方）ならいざ知らず、それ以外の場所では英語を第二言語としている人が圧倒的多数であり、英語の「正しさ」にこだわる人は少ない。これはその後、私が三十数年にわたって実感していることもある。

とはいっても、このインドの旅では語学の助け合いコミュニケーションは必ずしも吉と出ていなかった。前述したように、いろいろな人たちに騙されていたからだ。彼らは語学的には私に最大限の協力をしてくれていた。それはそうである。私と会話が成立しないとカネをせしめることができないからだ。初めて会った外国の人とこんなにスムーズに英語で話ができる！と私はつい感激してしまい、どんどん協力が甘くなっていたことは否めない。協働作業でどんどんカネを配給してしまっていたのである。

もうインド人に対しては絶対に気を許すまいと心に決めていた。特に「向こうから話しかけてくる人間は絶対に悪人」と肝に銘じていた。

「インド人の英語じゃない！」

ずいぶん長くなってしまったが、ここでインド各地の旅を終えてカルカッタ中央駅に降り立った場

面に戻る。私の風貌はワイルドであり、警戒心に満ちていた。旅慣れたムードを醸し出してははずだが、そんな外面に惑わされず正確に私の内面を見抜いている男が一人いた。そいつはふつと私に近づいて声をかけてきた。

「ハロー！ 君ひとりかい？」

話しかけてきた男はジョンと名乗った。

あろうことか、私はこの日の晩、このジョンにパスポートと帰りのチケットと有り金残らず騙し取られてしまったのだ。あれだけ「向こうから話しかけてくる人間は悪人」と自分に言い聞かせていたにもかかわらず。

なぜ、このような失敗をしたのか。皮肉なことに最大の原因は「英語」だった。男は若いアジア系の顔立ちをしており、「マレーシア人」で、クアラルンプールから旅行に来ている」と自己紹介した。彼の英語は流暢だがたいへん聞き取りやすく、なによりも「舌が巻き舌ではなく、この一カ月間インド旅行で聞き続けた英語とまるでちがった。

「ああ、インド人の英語じゃない！」と私は瞬時に安心してしまった。

つまり、彼はインド人じゃないから信用しても大丈夫と思ひ込んでしまったのだ。

ジョンは「部屋をシェアしないか」ともちかけてきて、私は「いいよ」と答えた。ツーリスト同士で部屋をシェアするというのは珍しくないからだ。あとで考えれば彼の言動は明らかにおかしかったのだが、残念ながら私はそれに気づかなかった。

彼との打てば響くような英語の会話を楽しみながら、自ら奈落の底に落ちていったのだった。

語学の天才まで1億光年
高野秀行・著

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定 価：1,870 円（10%税込）
発売日：2022 年 9 月 5 日
I S B N：978-4-7976-7414-9

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)